

## 追悼のことば

慰霊祭実行委員会枕崎市長 田代清英（第5代枕崎市長）

黒島流れ 90 周年海難慰霊祭にあたり謹んで追悼の言葉を申し上げます。顧みれば、坊津を中心とする南薩沿岸は、遣唐使の昔から、中国大陸への交易の窓口であり、外国文化移入の地でもありました。

徳川の鎖国、400 年の間に、かつお漁をはじめ、沿岸漁業や鯉節の製造が盛んとなり、明治に入って急速な発展をみました。しかし、明治の末期までは、大きくても七反帆六丁櫓程度の帆船に過ぎず、「沖イデ」「島イデ」等の技法を駆使しながら、列島伝いに前進基地を設け、トカラ・奄美・沖縄と、怒涛と戦い、身を挺して漁場を開拓したのであります。

この時代は海洋気象の予測が未熟なこともあって、一夜に数百人の犠牲を出した大量遭難の苦しい出来事も少なくありませんでした。特に明治 28 年 7 月 24 日の「黒島流れ」は、南薩の犠牲者、713 人を算し、失われた船、280 隻余に上る悲惨な台風災害でありました。黒島を中心とし、トカラより甬島に至る南薩西海域は、溺死して島に漂着するもの、破船とともに行方知らずになるものその数を知らず、惨状は誠に筆舌に尽くし難いものであります。

一家の大黒柱を失い、親子兄弟と別れた遺族の悲嘆もまた、見るに堪えないものがあり、朝に夕に悲しみ、恨みの泣き声は、辻々に満ちたといわれます。

中でも、枕崎の立神地区は、99 人の働き盛りの尊い命を失い、残された婦人

たちは、大願寺の僧、兼広教真師をはじめ、村の有志たちの勧めで、生計のため、鯉節の行商を始めました。寺の組織を利用して顧客を紹介された彼女たちは、超人的な必死の努力によって、幾山河の行程をものともせず、その商圈を拡大し、九州各地にさつま鯉節の真価を周知せしめる大きな功績を残したのであります。

また、私共の祖先は、このように、たびたび襲い来る天災の試練に屈服することなく、尊い犠牲の屍を超えて、繰り返し再建への方途に総力を傾け、海の男たちの夢と栄光への挑戦を続けてまいりました。

大正となり、石油発動機や無線電信の普及とともに漁場の範囲も南下して、現在では、最近の科学技術の粋を駆使し、南西太平洋全域、はるかに赤道を越えて活躍を続けております。中でも昭和の初め、扁舟を駆って、遠くパラオ・セレベスからバンダ海、或いは、ニューギニアまで、三回にわたり、未知の漁場への探検を繰り返し、雄図半ばにして、南海に骨を埋められた原耕先生の偉業は、実に日本水産市場、特筆すべきものであります。

ふるさとの歴史を顧み、未来への展望を策するとき、今日の繁栄の陰に幾多の尊い犠牲と、計り知れない苦悩と固い信念に満ちた命がけの生活の営みがあったことを思わずにはられません。

何時の時代でも、常に理想に向かって、大胆な発想のもと、研鑽を尽くし、最新の技法を導入して、刻苦勉励を怠らなかつた先人たちのすばらしい進取の気性は、私共の最も誇りとする伝承の資産であり、未来への光明でもあります。

「黒島流れ」90周年にあたり、今日、ここに関係の皆様御賛同と来賓各位はじめ多数の御参列をいただき現地、洋上に慰霊の式典を執り行うことになりました。往時を偲んで、感慨を新たにし、たびたびの海難に殉じて人柱となられた尊い犠牲者の霊に、心より哀悼の言葉とささやかな花束を捧げ、謹んで御冥福をお祈りするものであります。

さらに残された遺家族の言葉に絶する生活の闘いにも想いをいたし、永く後世に伝えて、理想のふるさとづくりへの教訓とし、決意を新たに参らなければなりません。

また、たびたびの海難事故に際し、身命を賭して救出にあたり、乏しい貯えの食糧を出し合っては、援護の手を尽くし、後年まで永く御交誼をいただいた三島村の皆様方の親身も及ばぬ温かい御心情に対し、改めて心から厚く感謝を捧げるものであります。